第三章　創造的 Q&A のすすめ

1.　指導の背景

(1) なぜ発問か：発問の存在意義

外国語教育における発問の意義

①教材の多角的検討(negotiation)を促すことによって、生徒の注意を教材へ向けさせる。

②言語材料への認知的負荷を増大させることによって、言語材料の定着を図る。

③教室内でのインターラクションを助長することによって、言語材料の定着を強化する。

(2)発問の種類

英語の授業で教師が発する質問には様々な種類や形態が存在する。

ア)目的

①言語材料の理解度を確認する発問

②言語材料の理解を促進し深化するための発問

③言語材料の運用を誘発し、促進するための発問

④インターラクションを誘発し促進するための発問

※①～③は基本的には学習者個人での学習、④ではペア学習やグループ学習が念頭に置かれている。

イ)使用言語

①英問英答（現在の教育ではこれが主流）

②英問日答

③日問日答

※日問英答は教師が手を抜いている、不平等という印象を生徒に与える可能性があるため望ましくない。

ウ)形式

①一般疑問文

②選択疑問文

③特殊疑問文（5W1H の形式）

※③が主流だが状況によって使い分けることが大切。

エ)機能

①display questions：発問者がすでに答えを知っている質問

②referential questions：発問者が答えを知らない質問

オ)内容（学習者からの回答の中身によって分類する）

①factual questions

②inferential questions

③personal questions

カ)対象

①クラス全体対象

②集団（ペア～グループ）対象

③個人対象

※いきなり③を使うのではなく、まずは学習者全員に教師の発問を自分の発問として意識させるために①を使い、その後に③を使うことが授業の鉄則である。

キ)発問者

①T-P 発問：教師が生徒に対して行う

②P-T 発問：生徒が教師に対して行う

③P-P 発問：生徒が他の生徒に対して行う

生徒一人一人が教師または他の生徒に対して積極的に質問できる雰囲気作りが重要である。生徒が自立した発問者になり、生徒同士で活発なコミュニケーションを取れることが望ましい。

2. 指導の実際

(1)伝統的 Q&A から一歩進んだ創造的 Q&A へ

一つの英文からなるべく多くの発問を作ることができることが望ましい(5W1H)。

現職教員に教材をもとにした作問をさせたところ共通点が 2 つあった。

①全て特殊疑問文である

特殊疑問文の利点：一般疑問文や選択疑問文の場合とは異なり、生徒は本文中の表現をなるべく多く使って答えなければいけないということ。

一般疑問文も使われるが、生徒から出てくる単語は Yes./No.など語彙が少ないためアウトプットを生徒から引き出すにはあまり好ましくない。

しかし生徒の中には特殊疑問文ではうまく答えられない生徒もいるためその際には一般疑問文・選択疑問文へと切り替える必要がある。

②display questions が多い→教師が答えを知っている

ただ教科書の内容を質問する(factual questions)のではなく、登場人物の感情や、生徒の経験や感情に関る発問(personal questions)や内容の精査を要求する発問(inferential questions)を使うことで教材を媒介とした教室内インターラクションが充実する→referential questions を多くすることが大切。

また生徒の回答に対し即座に次の関連質問を行うことが大切。

感想・考察

この章では教師の発問にはインターラクションを誘発し促進するという働きがあると述べ

られていたが、私はこの働きは教師からの発問だけではなく生徒からの発問にも当てはまると考えている。その場合の例をここで述べる。私が考えているのはグループの中で一人の生徒が他の生徒に対し何か質問をするというパターンである。ある生徒が他の生徒に質問し、その発問に対し他の生徒が回答する。そしてそこからその回答に関する話が世間話のように続いていく。このパターンにおいては、教師は直接関っていない。あくまで生徒たちの間で起こっているインターラクションである。このパターンのメリットとしては教師が関らないため普段の友達同士での会話のようにお互い話すことができるということが考えられる。しかしここでもやはり生徒のモチベーションが関ってしまう。生徒たちに恥ずかしがらずに会話をさせる方法を考える必要がある。
この章では教師の発問についてしか言及していないためこのようなパターンは考えられていないのであろうがこのパターンも英語教育に採用することができるのではないだろうか。